全盲の職員 第一線で奮闘

兵庫県明石市

熊本市が身体障害者対象の職員採用試験で全盲の人の受験を認めていない問題で、幸山政史市長が2日、市議会で来年度の受験資格を見直すと表明した。これまで認めなかった理由は「文書を扱う事務は難しい」だが、現実はどうなのか。兵庫県明石市で、全盲の市職員が事務の仕事をこなす現場に密着した。

【2面に関連記事】

特報 Report

パソコン駆使 周囲も支援

神戸市の西に位置する明石市は人口約29万人。JR明石駅の近くに市生涯学習センターがある。スポーツ振興課、男女共同参画課と同じフロアの子育て支援課支援係(7人)の机で、全盲の桂田恵子主任(49)がパソコンに向かっていた。

メールも自在

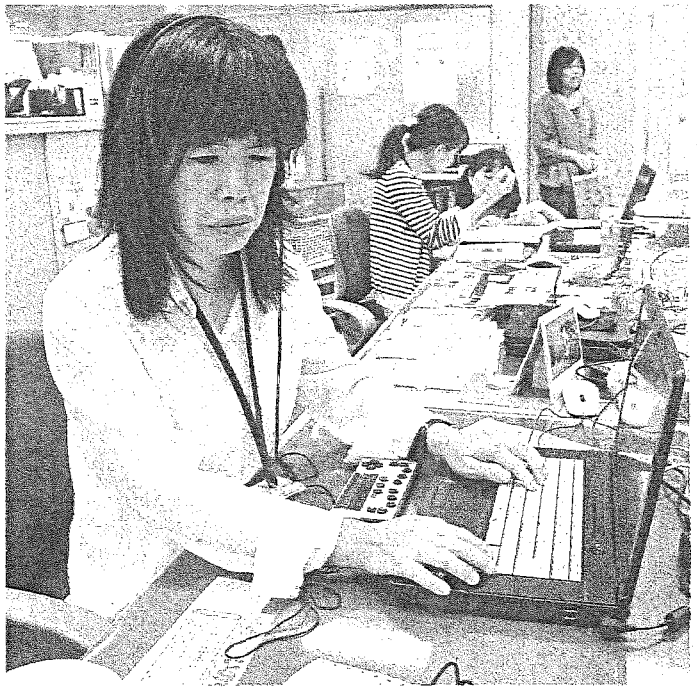
桂田さんが両耳に着けているのは、パソコンにつないだヘッドホン。画面には、市の育児応援サイトのお知らせなどの関連資料。音声読み上げソフトを使って文書を読む。パソコンのキーは難なく操作し、メールのやりとりも自在だ。

今の職場は8年目。「今年は『子育て家庭ショートステイ』も担当しています。親が病気などの際、子どもを施設などに一時的に預ける事業です」と桂田さん。利用申請があると、受け入れ先を調整する。

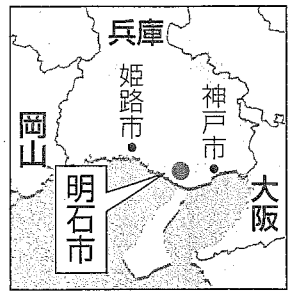
桂田さんは先天性の視覚障害のため盲学校で学び、1994年に電話交換手として同市に採用された。2006年、市が組織見直しで現業職の人を対象に事務職への変更希望を募り、桂田さんも手を挙げた。「新しい仕事にチャレンジしたかった。不安はあったが、IT化も進んでおり、パソコンの文書は扱えると思いました」

人事課には「どこまで仕事ができるのか」と慎重意見もあったものの、本人の希望を尊重。周囲が支援することで可能と判断したという。職種変更の試験を経て、07年4月から子育て支援課に配属された。

最初の3年は、録音内容を文字化する会議録の作成が主な仕事だったが、田中典子係長(49)は「桂田さんは行動的。もっと能力を生かせる」と、主催講座の募集や申し込み受け付けを任せるなど、仕事の幅を広げた。



明石市子育て支援課で働く全盲の桂田恵子さん。ヘッドホンを着け、音声読み上げソフトを使ってパソコン内の文書を処理する＝兵庫県明石市



読み聞かせ役

桂田さんができないこともある。活字印刷文を読むことだ。庁内では事務連絡などの回覧も多い。それらは隣席の太田愛さん(48)が読み聞かせる。任期付き職員の太田さんは桂田さんの「補助役」として配属され、係の業務を手伝いながら桂田さんを支える。

桂田さんがパソコンで作成した文書の体裁を点検したり、職員研修に同伴することも。「一人で大半のことはできるので、私が補助することはそれほど多くありません」と太田さん。不在の時は、ほかの職員が支え合う。

「事務職にチャレンジする機会を与えてもらったから可能性が広がり、周囲の支援もあって能力を発揮できている」と桂田さん。ごく自然体の雰囲気の職場で、充実感に満ちた表情を見せる。

同じスタート

明石市は、市役所内に障害者作業所を開設し、手話や点字などのコミュニケーション環境整備の条例づくりを進めるなど、独自の障害者支援策に力を入れている。

昨年度初めて身障者対象に実施した職員採用試験では、点字などの試験を用意しただけでなく、「自力通勤の可否は問わず、勤務にあたっては適宜必要な支援を行う」と要項に明記。障害者団体の意見を聞いた上で、多くの自治体に見られる「自力通勤」などの条件を設けなかった。

泉房穂(ふさほ)市長(51)は「今後も門戸を狭めるつもりはない。障害があっても、持っている能力が市民のためにプラスになるなら、市としてできる限り支援する。スタートラインには等しく立ってもらいたい」と強調する。

(中村勝洋)